
謎のブラックミニ

輝 美津夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

謎のブラックミニ

【Nコード】

N06700

【作者名】

輝 美津夫

【あらすじ】

ある日、OLの沢田真理の携帯に、謎のメールが受信される。間違えメールと思いつつも、いかにも真理を監視しているかのような内容のメール内容のため、恐怖に怯える。ある日、帰宅するとそこには……。

「はあ、疲れたあ」

と言つて都内にあるアパートに帰ってきた沢田真理は、洋服を着たままベッドの上に横たわった。真理は東京の八重洲にある会社に務めるOLである。ウトウトしてしまったのか、しばらくして目が覚めた。ふとテーブルの上の携帯に目をやると、メール着信を知らせるイルミネーションが光っていた為、真理は受信メールを確認した。「お帰りなさい。お疲れ様。ブラックミニより」と書いてあった。

「ブラックミニって。だれ？」

と思いながら、アドレスを見るとやはり見覚えがない。受信時刻を見ると、アパートに帰って来た10分後だった。

「なんか、きもいけど・・・。間違えメールかな」

と真理は思ったものの、その日は仕事で疲れていたため、シャワーを浴びてからぐっすりと眠った。

翌日もいつも通り会社に出勤し、仕事を終えた後、同僚の美由紀と一緒に夕食をとり、午後9時頃にアパートに帰ってきた。その直後に真理の携帯にメールの着信音が鳴った。

「お帰り。毎日ご苦労さんやね。今日の黄色い花柄のワンピース、よく似合っているで。ブラックミニより」

真理は全身が凍りつくかのように鳥肌がたつた。確かに黄色い花柄のワンピースを着ていたからだ。

「誰？どこかで私を誰かが見ている。これってストーカーじゃん」
真理はその瞬間、恐怖に怯えた。すぐに同僚の美由紀に電話をして、昨日と今日のメールの件を話した。

「真理が帰ってきた時間も知っている、着ている洋服も知っているとなると、間違えメールではなさそうだね。いったい誰がどこで見

ているんだろう。こんな事を言ったら失礼かもしれないけど、真理が2ヶ月前に分かれた彼氏って事は考えられない？」

と美由紀が言った。

確かに真理は2ヶ月前に彼氏と別れたばかりで、その彼氏が真理に未練があつて、近くをうろろろしているとも考えられる。

「でも、元カレは転勤で北海道に行ったはずだし、そんな事をする人ではないと思うけど。でも会社を辞めてこっそり私の近くにいるなんて事も考えられるし。なんか気持ち悪い」

「もし、明日も同じようなことがあつたら、元カレに連絡してみたら。今日はとにかく、玄関と窓の鍵をしっかりと閉めてカーテンも隙間がないようにしっかりと閉めてから寝なさいね。何かあつたらすぐに私に電話していいからね」

と美由紀が言った。

真理は翌日もいつも通り出社して仕事をしていたが、メールの事が気になって仕方がない。自然と周りの男性の事を疑いの目で見るようになってしまう。

「ブラックミニ？黒い小さい。黒。小。小黒。えつ。小黒課長？」

真理は、奥の机に座っている開発課の小黒課長を見た。しかし、小黒は真理の視線にも気が付かず、一生懸命、電話で取引先に製品の説明をしている。小黒はどちらかと言うと女性にはあまり興味がなく、仕事一筋で一匹狼的な存在である。そんな小黒に恋心をもつ女性社員が数名いる事は、社内のOL達の間でも話題になっている。真理もその一人ではあつたが、その瞬間、小黒に対する意識が変わった。勝手な想像ではあるが、昼間は仕事熱心になっているが、仕事から離れると別人のようになる、なんていう事も考えられるからだ。元カレ？小黒課長？いったい誰なのだろう。

その日は、週末という事もあり、久しぶりに大学時代の友人と食事をして、例のメールの件を話した。

「美由紀さんという人の言う通り、元カレに連絡してみるのもいいと思うよ。ちょっと怖いと思うけど。で、もし何かあったらとにかく警察に通報しなよ」

と友人は真理に言った。

「わかった。そうするよ」

と真理が言った。時計を見ると午後11時を過ぎている。

真理はいつものようにアパートに帰った。そしてその直後、真理の携帯に受信メールの着信音が鳴った。真理は恐る恐る受信メールを開いた。

「今日はやけに遅かったやん。俺、暗いところが好きやから別にええんやけど、ちょっと寂しいねん。ブラックミニより」

真理はいい加減に頭にきたので、思い切って元カレに電話をした。「いい加減にしてよ。あなた今どこにいるのよ。変なメールを送ってこないでよ」

と真理は言い、今までのメールの件を話した。

「何の事だよ。俺は今札幌にいるし、そのメルアドだって俺ではないはずだよ。こっちこそいい加減にしてくれよ」
やはり、元カレではなかった。

次の月曜日。真理は会社に着くや否や、小黒課長の机に向かった。「小黒課長、メールの件、止めてくれませんか。ブラックミニだなんて。本当にはかばかしい。いい加減にしてください」

「沢田くん、何を言ってるんだね、朝から。俺には何の事だかさっぱりわからん。しかもブラックミニって。俺をばかにしてるのか。いい加減にしてくれよ」

どうやら小黒課長でもないらしい。

真理は、もうどうしていいかわからず、今夜、メールがきたら、警察に通報しようと思った。そして、夜アパートに帰り部屋の灯り

を付けると、床にいる小さな黒い物体が目に入った。

「げっ。ごきぶり」

と言って殺虫剤スプレーを取りに行った。そして殺虫剤スプレーをそのごきぶりに向け、噴射しようとした時、真理の携帯にメールの着信音が鳴った。真理はそんな事を構わずに殺虫剤スプレーをごきぶりに向かって噴射した。ごきぶりはバタバタとしてひっくり返り、その後ピクリとも動かなくなった。

真理は、ティッシュでごきぶりをゴミ箱に捨てた後、やれやれと思いい、先ほどの受信メールを恐る恐る見た。

受信メールには、

「えっ。ちよつと待ってーなあ。殺虫剤スプレーで俺を殺さんとい
て、真理さん。頼むわ。ほんまに。ブラックミニより」
と書いてあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0670o/>

謎のブラックミニ

2010年11月2日09時58分発行